

「ミャンマー視察ミッション」事務局を終えて

日韓産業技術協力財団
第三事業部長 初瀬川 茂

当財団では、日韓両国のみならず第三国において日韓連携によるビジネス機会を探る事業を昨年から展開している。今年度はアジア最後のフロンティアとして注目のミャンマーに焦点を当て、日韓の両財団が事務局となり視察ミッションを派遣した。



今回のミッションには両国企業を中心に総勢 48 名が参加し、2 月 23 日から 26 日までヤンゴン市内に滞在した。事務局が事前調査を重ねて作成した手づくりの視察プログラムに沿って、両国に関係深い工業団地などを精力的に視察し、現地駐在の日韓企業も加わったセミナーにて、ミャンマーへの投資可能性について活発な議論が行われた。

今回視察ミッションの狙いと結果については他稿に譲り、ここではミッション事務局の一員として参加した小職が、現地にて肌で学んだ教訓や感じたことを幾つか紹介したい。

◆ビジネスのフィールドが違くと、これまでの「常識」は通用しない

日韓両国での様々なビジネス交流の場面では既にお互いの共通認識＝常識となっていることでも、慣れない第三国においては現場で確認する、実際に体験してみることの大切さを痛感した。

その最初の場面は視察初日のセミナー会場であった。60 人超の日韓ビジネスマンが現地ホテルの会議場に集まり、まず現地駐在の JETRO および KOTRA 所長からミャンマーの



投資環境および日韓企業の進出動向について概況レクチャーを受けた。続いて参加者から多くの発表・発言があり、活発な討議が 2 時間半にわたり続いた。

この会議は、ミッション同行の韓国プロ通訳者 2 名による、日韓 2 か国語の同時通訳で進行した。事前にホテル側にそのための同時通訳設備の業者手配および同通ブース設営を依頼した時点では、いつものミニ国際会議の設定であり、特に

困難はなかろうと安心していった。

会議開始 1 時間半前によく会場および同通設備の配線が完了し、通訳者と一緒に最終動作確認を行った。最初の驚きは、同通レシーバーのチャンネルが 1 つだけしかないこと。いつも 2 チャンネルで日本語／韓国語を各々流す我々の「常識」が通用しない。業者に尋ねると、どうしてチャンネル 2 つも要るのかと怪訝な顔。事前確認不足を悔やみながら、やむなく郷に従い、現場の判断で会議参加者にレシーバーを付け外してもらって 1 チャンネルのみで対応することとした。

さらに、マイクテストのため講演者卓を見るとマイクが 2 本セットされている。どうして 2 本なのかと尋ねると、1 本は会議場内スピーカー用、もう 1 本は同通ブースに音声を伝えるためとのこと。えっ、2 系統の音声ケーブルが相互接続されていないとは！ しかも会議テーブル上の発言者マイクの音声が同通ブースに入らない（接続されていない）ことが発覚した。会議開始直前であり今から配線変えする時間はない。やむなく会議発言者に予備のワイヤレスマイクで大きな声で話してもらい、その会場スピーカー音声を同時通訳者が何とか聞き取って通訳する、という苦しい現場対応となってしまった。



加えて、事前にホテル側に会議内容の録音を依頼していたが、これまでやったことがなく実現困難との最終回答があった。今から思えば、その時点で何か当方の想定と違うことに気づくべきであった。現地 IT 利用環境とレベルを正しく理解しようとしないうまま、普通の会議設定と思い込んで準備を進めていた勝手な先入観の結果と、大いに反省した次第である。

当日の参加者および通訳者には快適でない環境での会議進行となり多大な迷惑をかけてしまったが、皆さん好意的で文句も言わずに協力していただき、結果として会議の内容がとても充実したものとなったことが、せめてもの救いであった。

会議後の交流会にて、何人かの参加者から対応の労を労われた。これも地図のない道に行く今回の視察ミッションで得られた、「現地を理解する」教訓として肝に銘じた次第である。

◆ミャンマー経済発展にはインフラ整備が喫緊の課題

翌日、視察団は 2 台の大型バスに分乗し、一昨年末に日本政府とミャンマー政府が開発協力で調印したティラワ経済特別区 (Thilawa SEZ) を視察した。全 2,400ha の SEZ 敷地のうち、先行して 400ha の工業団地を 2015 年夏に開業するべく、日本・ミャンマー共同出資の開発会社(MJTD)が今年 1 月設立された。



現地では、当該敷地の整地中で多くのトラックが作業している様子を見ることができた。今後、電力、上下水道、道路、通信などのインフラ整備が必須である。その分野でも日韓企業の連携可能性を期待できるであろう。このティラワ地区で唯一既に稼働中なのがティラワ港湾施設（Myanmar International Terminals Thilawa）である。香港系企業が運営しており、視察当日も 5 隻の貨物船が入港して荷役中であった。ティラワ港はヤンゴン港よりも水深が深く大型船の入港が可能で、ティラワ SEZ の物流の要として期待される。



視察団一行は、ヤンゴン市内に戻り、昼食でミャンマー料理を体験した後、午後から火力発電所建設予定地に向かった。

ヤンゴン市街から程近いタケタ地区に韓国企業連合が 500MW 級のタケタ火力発電所（Gas Turbine Power Plant Thaketa）を建設することとなり、その建設予定地を視察した。未だ着工前だが、現場の建設事務所内で計画の説明を受けた。

ミャンマーでは急激な経済開発の波に電力供給が追いつかない深刻な状況がある。既に外国企業が多く入居するヤンゴン市内のミンガラドン工業団地（Mingaladon Industrial Park）でも、計画停電により通電は 1 日 5 時間のみ。しかも突然の停電が頻発する状況であり、各社とも操業には自家発電が欠かせず、過大な負担を強いられている。

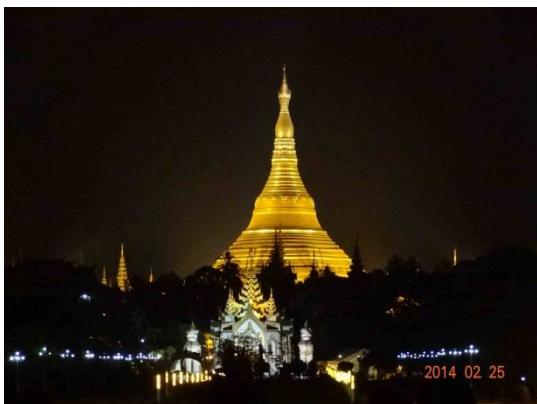
ミャンマー経済発展のためには、発電能力の増強と安定した電力供給が先決であり、先のティラワ地区へ送電するためにも発電・送電設備の先行整備が急がれる。

◆ミャンマーの基盤は仏教文化

ミャンマーは人口 6 千万人の 9 割が仏教徒であり、その温和な性格から日本人との相性がよいとも言われる。人口構成では生産年齢



人口の層が厚く、他の ASEAN 諸国と比べても安価で豊富な労働力がミャンマーの大きな強みである。



ミャンマー人の気質を理解することは現地でビジネスを行う上で不可欠であろう。ただし、今回の僅か数日間のヤンゴン滞在でホテルや視察先での数人のミャンマー人と接しただけで、わかったようなことは申せまい。

今回ミッションでは、韓国側参加者は二日目の視察のあと夜行便で帰国したが、その夜ヤンゴン空港へ向かうバスの車窓から、ヤンゴン市内でランドマーク的存在であるシュエ

ダゴン・パゴダ (Shwedagon Pagoda) がライトアップされた姿が印象的であった。

翌朝、日本側参加者の一行は、短時間ながらミャンマーの仏教文化に触れるため、そのシュエダゴンパゴダの内部を見学した。観光客も多いが、信心深いミャンマーの人々が日々の祈りに来ている姿が多く見られた。彼らに混じって我々も、ロンジー姿のミャンマー人ガイドに案内され、広い寺院の内部を回った。各仏像の意味とお参りの作法等を教えられ、ミャンマー人の心の拠り所を垣間見る貴重な体験を行うことができた。



今回の現地ガイドは非常に優秀で、独学で流暢な日本語を操り、質問に的確に答える姿勢はミッション参加者からも信頼を得ていた。ミャンマーにこのような人材ありと知ったことも、今回の成果の一つと言えよう。

日本側参加者はこの後、ヤンゴン空港からバンコクへ飛び、空港近くのホテル内で、現地駐在の日本企業から、タイから見たミャンマー経済について説明を受け、最後の情報交換を行った。

今回すべて手づくりの視察プログラムであったが、いわゆるレクチャー型ではなく、参加者が現場に足を運び現地の様子に直接に接していただくことを主眼に構成した。



事務局として参加した今回視察ミッションでは、数々の失敗体験も含めて「現場を知る」ことの大切さを改めて学んだ。このことが小職にとって最大の教訓であった。

以上